

第1章

子どもが意欲的に 取り組む授業づくり

「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」をキーワードに、本研究の背景、目的及び内容を解説します。

学業指導とは、それぞれの学級を「学びに向かう集団」に高めながら、児童生徒一人一人が自らの力で様々な不適応を解消し社会性を身に付けたり、意欲的に学習活動に取り組んで学力を向上させたりして自己実現（社会的自立）を図っていくための指導・援助のことです。

本県では、平成21年1月に教職員用リーフレット「あなたは、学業指導を知っていますか！」を発行して以来、あらゆる活動を通して学業指導に取り組むことを推進してきました。

また、このリーフレットをもとに、平成24年3月に教職員のための指導資料「学業指導の充実に向けて」を作成し、集団づくり・授業づくりの視点や実践例、取り組む際の留意点を示しました。

右のQRコードを利用すると、それぞれの資料をご覧いただけます。



リーフレット



指導資料



指導資料
「学業指導の充実に向けて」

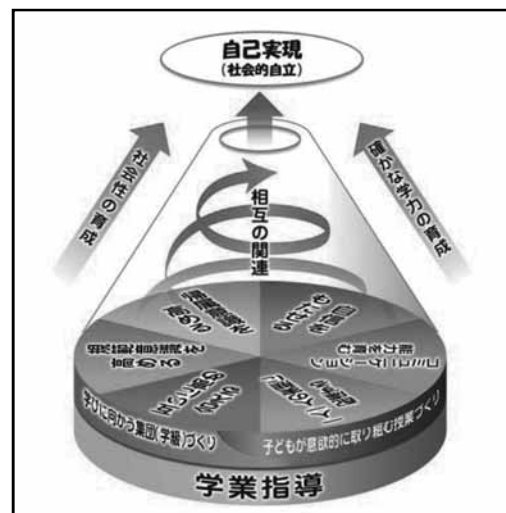
学業指導を推進するには、「学びに向かう集団づくり」と「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」の両側面から取り組むことが求められています。

右の図は、両者が相互に関連を図りながら、将来の自己実現（社会的自立）を目指していくことを表しています。ここで大切なのが、「相互の関連」です。図中に螺旋状に上昇している矢印が描かれていますが、これは、「集団づくり」と「授業づくり」を相互に関連させながら一体的に行うことを示しています。

例えば、

- ・「集団づくり」を意識した「授業づくり」
- ・「授業づくり」を意識した「集団づくり」
- ・「帰属意識の高い学級づくり」を「互いに高め合える学級づくり」につなげる。
- ・「コミュニケーション能力を育む授業づくり」を「自信をもたせる授業づくり」につなげる。

このように、縦にも横にも関連性があることを念頭に置き、意図的・計画的に実践していくことが大切です。



学業指導のイメージ図
(上記指導資料p2 参照)

指導資料では、「学びに向かう集団づくり」の三つの視点とこれらの学級像を、また、「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」の三つの視点とこれらの授業像を次のように示しています。

学びに向かう集団づくり	子どもが意欲的に取り組む授業づくり
①【視点】帰属意識の高い学級とは 一人一人が学級に所属感や連帯感を感じる居心地のよい学級です。 このような学級では 児童生徒は自らが集団の一員であることに誇りをもち、集団に役立っていることに喜びを感じています。また、人間関係は良好で関わり合いが活発に行われ、互いに認め合い仲間として協力し合って生活しています。 ②【視点】規範意識の高い学級とは 集団生活や対人関係におけるルールが児童生徒に共有され、当たり前のこととして定着している学級です。 このような学級では 児童生徒はルールの意義を理解し、自主的に遵守しながら、規律ある集団生活をしています。不適切な言動が減り、集団内の人間関係が良好になります。 ③【視点】互いに高め合える学級とは 児童生徒に建設的な相互作用がある学級です。 このような学級では 児童生徒はそれぞれの個性や能力を発揮しながら生活し、互いをモデルにしたり切磋琢磨したりして意欲的に諸活動に取り組んでいます。また、学級内の生活や活動に自治が確立していて、集団としてもより高い目標達成に向けて一人一人が主体的に貢献しています。	①【視点】自信をもたせる授業とは 「できた」「分かった」という喜びや達成感が味わえる授業です。 このような授業では 一人一人が活躍できる場が設定されており、よいところを認めたり、ほめたり、励ましたりする教師の意図的な働きかけがあります。発達の段階に応じて、選択の場面を設定し自己決定させ、成功体験を積み重ねます。また、教える内容を効果的に習得させるために教材・題材の開発と作成、発問や指示の構成などの指導方法の継続的な工夫・改善を続けています。 ②【視点】コミュニケーション能力を育む授業とは 協同で学ぶ「学び合い」がある授業です。 このような授業では 学び合いの中で、児童生徒たちは自分の思いや考えを分かりやすく相手に伝えようとするともに、相手の思いや考えを理解し尊重しようとしています。その繰り返しの中で、コミュニケーション能力が育まれます。授業の中にペア学習やグループ学習など、全ての児童生徒が話したり聞いたりする場があります。 ③【視点】一人一人の実態に配慮した授業とは 児童生徒の様々な能力や適性、特性に応じて、学習上の不適応状態を予防する手立てが実践されている授業です。 このような授業では 一人一人の能力や適性、特性、意欲の状態等の現状を把握し、個に応じた支援策に基づき支援します。その際、教職員間で連携し、組織的な指導・支援体制を整えます。
学びに向かう集団づくりと子どもが意欲的に取り組む授業づくり 「学業指導の充実に向けて」 p 3～4（栃木県教育委員会 平成24年）	

互
い
に
関
連
を
図
り
、
指
導
を
充
実
さ
せ
る



本県における学業指導の取組状況

(1) 学業指導の取組状況の概要

当センター研究調査部員が、ここ2年間に学校訪問や研修等で見聞きした県内小・中・高等学校の学業指導の取組状況を次に示します。

① 学びに向かう集団づくり

指導資料「学業指導の充実に向けて」に示されているような取組が行われています。次に示すのは、主な取組例です。

学級（ホームルーム）経営上での取組例	教科指導に関わる取組例
・朝の会での呼名 ・帰りの会でのよい行動の発表 ・学級目標の作成 ・学校祭での取組 ・係活動の充実 ・掲示物の工夫 等	・チャイム着席 ・学習のきまり ・話し方・聞き方のきまり 等

② 子どもが意欲的に取り組む授業づくり

「学びに向かう集団づくり」と同様に、指導資料に示されているような取組が行われています。

授業中の取組
・発言しやすい教室環境づくり ・「課題」を分かりやすく児童生徒へ提示 ・聞き方名人・話し方名人 ・学習形態の工夫 ・児童生徒の現状把握 等

(2) 質問紙調査から見える取組状況

リーフレット「あなたは、学業指導を知っていますか！」（栃木県教育委員会 平成21年）を基に、質問紙「集団や授業づくりに関するアンケート」（p 66 参照）を作成し、当センターにおける教職2～5年目（5年目）及び教職10年目研修受講者を対象に調査を実施しました。

① 実施期日

- ・平成25年7月12日（金）教職2～5年目（5年目）研修受講者
- ・平成25年7月24日（水）教職10年目研修受講者

② 有効回答者数

学校種	小学校	中学校	高等学校
回答者数	139（5年目68、10年目71）	148（5年目68、10年目80）	47（10年目47）

③ 質問紙調査の結果

「学びに向かう集団づくり」と「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」の各項目の調査結果を右ページの表にまとめました。

「学びに向かう集団づくり」に関する調査結果

数値は4件法で調査した平均値

	質問項目	全体	小学校	中学校	高校
帰属意識の高い学級	子どもたちが協力して取り組めるように活動を工夫している。	3.38	3.41	3.42	3.15
	一人一人が、個性や能力に応じた役割を担えるように工夫している。	3.09	3.12	3.09	3.02
	行事等に企画段階から子どもたちが関われるように工夫している。	3.16	2.93	3.34	3.26
	他の学級、学年など、いろいろな集団との交流の場を設定している。	2.96	3.26	2.77	2.45
	子どもたちと感動を共有できるように心がけている。	3.54	3.53	3.64	3.30
規範意識の高い学級	学年、学級で守るべきルールを具体的に定めている。	3.60	3.71	3.57	3.26
	規律については教職員間の共通理解のもと、ぶれない指導を実践している。	3.39	3.42	3.39	3.28
	子どもたち自身に学級の約束を決めさせている。	2.95	3.09	2.93	2.42
	時と場に応じた行動がとれるように指導を工夫している。	3.36	3.44	3.36	3.11
	日々の生活や行動を謙虚に振り返る時間や場を設けている。	2.96	3.04	2.99	2.42
互いに高め合える学級	学級の目標を子どもたちと一緒につくっている。	3.34	3.40	3.56	2.06
	将来どんな生き方をしたいかを互いに話し合う機会を設けている。	2.53	2.40	2.66	2.48
	競い合う場面や助け合う場面を意図的に設定している。	3.15	3.24	3.12	2.94
	当番活動や係活動を活用した学級経営をしている。	3.70	3.76	3.71	3.32
平 均		3.22	3.27	3.25	2.94

※ [4 あてはまる 3 どちらかといえばあてはまる 2 どちらかといえばあてはまらない 1 あてはまらない]

「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」に関する調査結果

数値は4件法で調査した平均値

	質問項目	全体	小学校	中学校	高校
自信をもたせる授業	授業の中で一人一人が活躍できる場を意図的に設けている。	3.02	3.24	2.91	2.72
	子どものよいところを認めたり、ほめたり、励ましたりしている。	3.65	3.73	3.58	3.60
	一人一人の実態に応じて、授業の指導計画を工夫している。	2.73	2.81	2.68	2.64
	授業の中で児童生徒が自ら選択できるように、多様な学習方法を用意している。	2.44	2.48	2.45	2.28
コミュニケーション能力を育む授業	授業の中で友人の発表をしっかりと聞けるように指導している。	3.50	3.67	3.45	3.15
	授業の中で自分の考えをまとめ、発表できるように指導を工夫している。	3.04	3.24	2.98	2.68
	授業中に、考える、互いに教え合う、指導する場面をバランスよく設定している。	3.03	3.16	3.01	2.74
	授業中に小集団活動を取り入れ、子ども同士のコミュニケーションを促している。	3.24	3.39	3.29	2.64
	自己評価、他者評価を生かした授業を実践している。	2.64	2.67	2.67	2.43
一人一人の実態に配慮した授業	学習不適應の解決に、教職員が協力して取り組んでいる。	3.23	3.39	3.14	3.04
	日記、作文などとおして、自分の心を表現する指導を行っている。	3.30	3.32	3.45	2.48
	実態調査、教育相談などとおして、学習不適應の把握に努めている。	3.43	3.45	3.44	3.29
平 均		3.10	3.21	3.09	2.80

※ [4 あてはまる 3 どちらかといえばあてはまる 2 どちらかといえばあてはまらない 1 あてはまらない]

④ 集計結果の特徴

※ここでは「学びに向かう集団づくり」を「集団づくり」、「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」を「授業づくり」と表記する。

○「集団づくり」(3.22)と「授業づくり」(3.10)の平均値は共に高く、良好な取組がうかがえるが、「集団づくり」の値の方がやや高い。

○学校段階が進むにしたがって、多くの内容項目の平均値が低下していく傾向がある。特に「授業づくり」では、その傾向が顕著である。

○全ての学校段階において次の項目の平均値が高い。

〈授業づくり〉

・「子どものよいところを認めたり、ほめたり、励ましたりしている。」

(小：3.73、中：3.58、高：3.60)

○全ての学校段階において次の項目の平均値が低い。

〈授業づくり〉

・「授業の中で児童生徒が自ら選択できるように、多様な学習方法を用意している。」

(小：2.48、中：2.45、高：2.28)

○小・中学校において次の項目の平均値が高い。

〈集団づくり〉

・「子どもたちと感動を共有できるように心がけている。」 (小：3.53、中：3.64)

・「学年、学級で守るべきルールを具体的に定めている。」 (小：3.71、中：3.57)

・「当番活動や係活動を活用した学級経営をしている。」 (小：3.76、中：3.71)

○高等学校では全体的に平均値がやや低い。

(3) 学業指導の取組状況のまとめ

○学業指導の充実に向けた取組が、県内の小・中・高等学校において着実に進められている。

○指導資料「学業指導の充実に向けて」に示されている実践例と同様の取組が行われている。小・中学校での「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」については、「授業における決まりごと」のような取組が中心である。

○学校段階が進むにしたがって、質問紙項目の数値が低下している。この原因の一つとして、校種による学級（ホームルーム）経営の性質の違いが考えられる。

学業指導の充実に向けた
取組が、各学校で着実に
行われていますね。



3

研究の目的及び内容

(1) 研究の目的

学業指導においては、「学びに向かう集団づくり」と「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」の両面が大切です。本研究では、本県の学業指導の取組状況を踏まえて、特に、各教科での授業づくりと学校全体での組織的な取組について方向性を明らかにすることにより、学業指導をより充実させることができるのではないかと考えました。

そこで、次のような研究の目的を設定しました。

【研究の目的】

学業指導における「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」に関して、教員や学校の具体的な取組についての調査研究を行うことを通して、児童生徒の確かな学力の育成を目指す。

(併せて、教科の授業における集団づくりの手立てを示す。)

(2) 「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」と「学ぶ意欲をはぐくむ授業づくり」の関係

【研究の目的】で取り上げた「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」について、どのように捉えればよいのでしょうか。「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」は、学業指導における2本の柱の一つです。当センターでは、平成22年度に「学ぶ意欲をはぐくむ」ことに関する調査研究を行いました。が、「学ぶ意欲をはぐくむ」ことが「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」と何らかの関連があるのではないかと考えました。

ここで、当センターにおける「学ぶ意欲をはぐくむ」ことの捉えについて確認します。

① 学ぶ意欲について

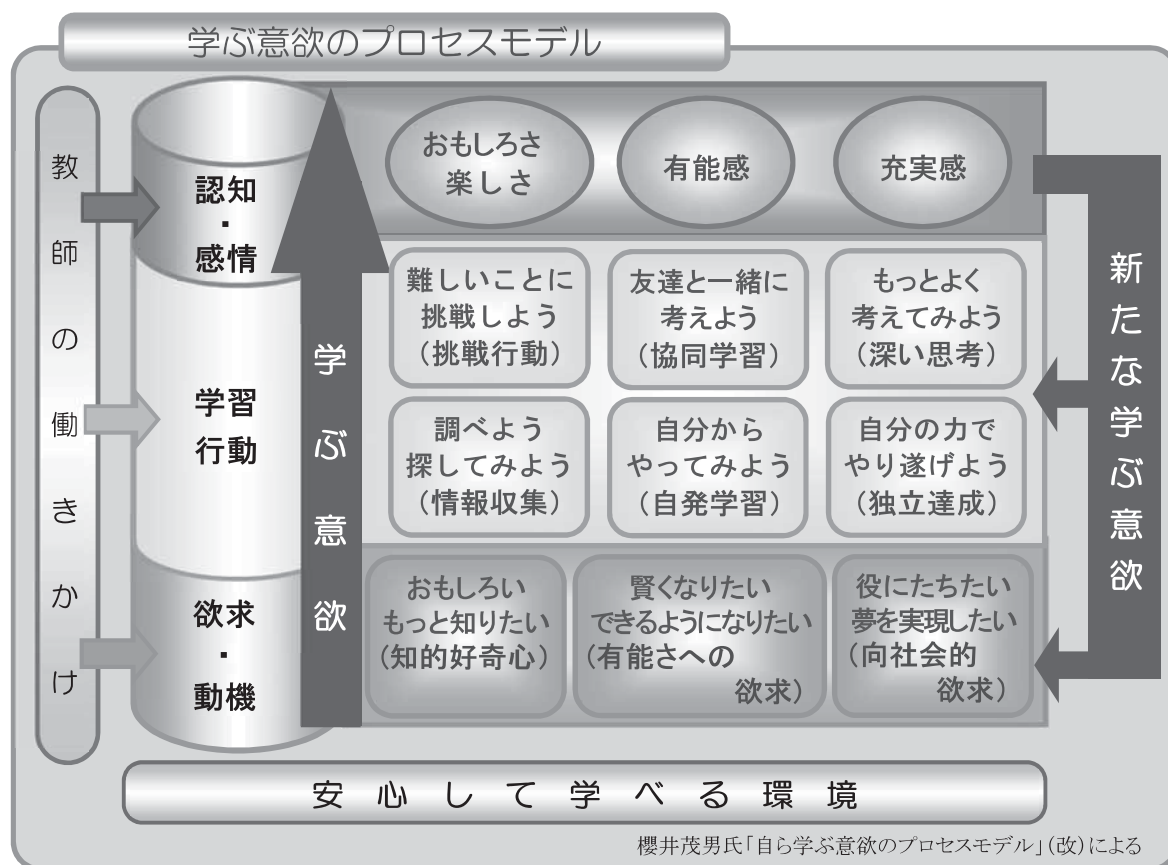
学力の重要な三つの要素の一つに学習意欲があります。当センターでは、これを学ぶ意欲と同義と捉え、次のように定義しました。

学ぶ意欲

学習者が意思をもって、自発的に学習活動を求めようとする心の働き

- 学習活動そのものに対する欲求…「学ぶこと自体がおもしろい」「知りたいから学ぶ」
- 自己実現の手段としての欲求…「よい成績を取りたい」「希望する職業に就くために学習する」

調査研究を進める中で、学ぶ意欲の構成要素や学ぶ意欲が育っていくプロセスを模式的に表したものが次のページの図です。



② 学ぶ意欲の構成要素

学ぶ意欲のプロセスモデルに示した各構成要素の解説を次に示します。

〔各構成要素の解説〕

レベル	構成要素	解 説
認知・感情	おもしろさ・楽しさ	結果に依存しない感情で、失敗したとしても感じることができ、知的好奇心が活性化していれば得られる感情。
	有能感	学習行動がうまくいったとき、成功したときに感じる人が多い感情。ほめられることにより、高まることもある。
	充実感	向社会的欲求に基づく動機が達成された場合に感じるすることができる感情。
学習行動	情報収集	主に知的好奇心によって、興味・関心のあることについて情報を集める行動。
	自発学習	自ら進んで学習に取り組んだり、計画を立てて学習をしたりする行動。
	挑戦行動	今よりも少し難しい問題に挑戦する行動。
	深い思考	問題の解決法を複数考えたり、よりよい解決法を考えたり、仮説や考えを自分なりに吟味したりする行動。
	独立達成	できるだけ自分一人の力で問題を解決しようとする行動。
	協同学習	友達と協力して問題を解決する行動。
欲求・動機	知的好奇心	未知のことや珍しいことに興味・関心をもち、それらを探究したいという欲求。
	有能さへの欲求	より有能になりたい、より賢くなりたいという欲求。
	向社会的欲求	社会や人のためになりたいという欲求。思いやりの気持ちとも関連する。

- ・ 安心して学べる環境：児童生徒の学ぶ意欲を高めるための子どもを取り巻く物的環境や人的環境（学ぶ意欲の構成要素ではないが、学ぶ意欲をはぐくむ上で土台となるもの）

③ 「学習に関するアンケート」について

学ぶ意欲をはぐくむためには、学ぶ意欲の現状を把握する必要があり、その方法の一つとして質問紙法があります。当センターでは、小学校3年生以上を対象とした「学習に関するアンケート」を作成し、ホームページ上で公開しています。アンケートのデータを「学ぶ意欲分析ツール」に入力することで、学校が学ぶ意欲の分析結果を得られるようにしました。

「学習に関するアンケート」は、本冊子 p 68にも掲載しています。



学ぶ意欲分析ツール

「学ぶ意欲をはぐくむ」ことと「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」の関連の検討に話題を戻します。「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」には、先述したとおり「自信をもたせる授業」「コミュニケーション能力を育む授業」「一人一人の実態に配慮した授業」の三つの視点（p 3 参照）があります。そこで、この三つの視点と「学ぶ意欲の構成要素」や学ぶ意欲の測定との関係について、次に示します。

ア 「自信をもたせる授業」と「学ぶ意欲の構成要素」との関係

「自信をもたせる授業」とは、『できた』『分かった』という喜びや達成感が味わえる授業です。つまり、「有能感」を高める授業と言えます。「有能感」を高めるには、成功体験を積ませることが必要です。成功体験に導くには、構成要素「独立達成」、「協同学習」、「挑戦行動」などへの働きかけが有効であると考えられます。

➡ 「自信をもたせる授業」と「学ぶ意欲の構成要素」への働きかけには強い関係がある。

イ 「コミュニケーション能力を育む授業」と「学ぶ意欲の構成要素」との関係

「コミュニケーション能力を育む授業」とは、「協同で学ぶ『学び合い』」がある授業です。この「協同で学ぶ『学び合い』」がある授業とは、構成要素である「協同学習」を行う授業と重なります。つまり、話し手として相手に分かりやすく伝えたり、聞き手として相手の話と自分の考えの共通点や相違点を整理したりするように指導することで、コミュニケーション能力を育むことができます。

コミュニケーション能力を育てるために、児童生徒が学び合う必要性を感じるような「知的好奇心」に働きかける課題を設定することも大切です。

➡ 「コミュニケーション能力を育む授業」と「学ぶ意欲の構成要素」への働きかけには強い関係がある。

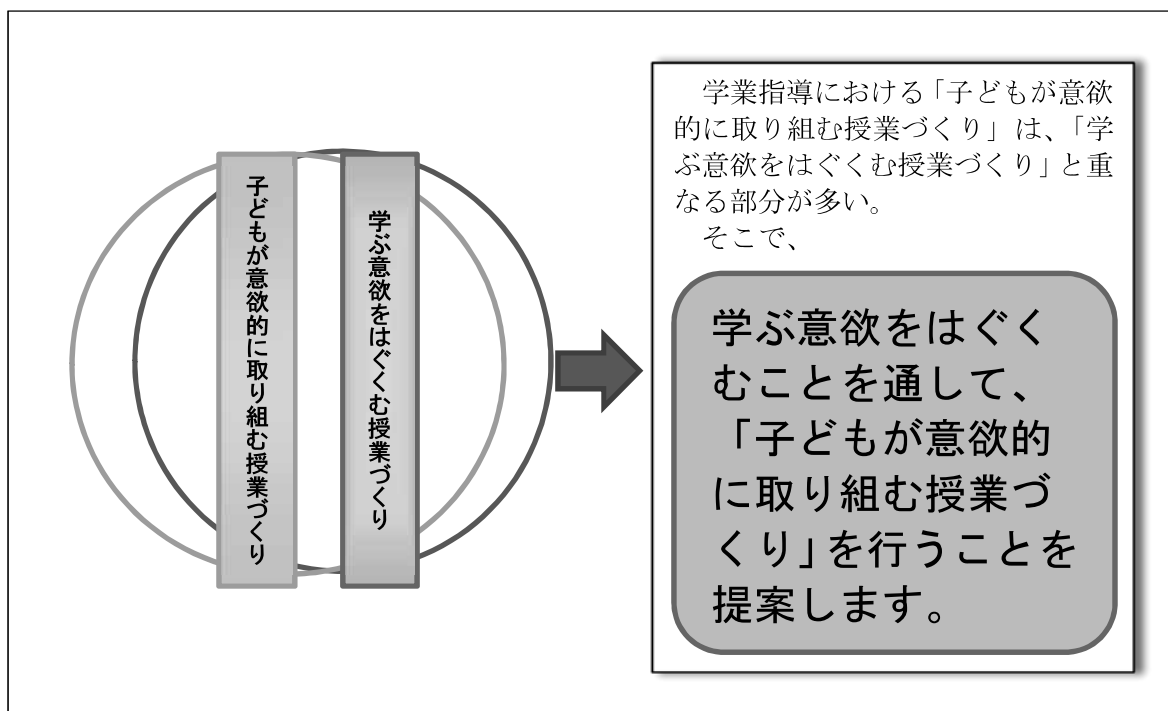
ウ 「一人一人の実態に配慮した授業」と学ぶ意欲の状況の把握との関係

「一人一人の実態に配慮した授業」のポイントの一つとして、児童生徒の学習状況の把握が挙げられています。実態把握に基づき、時には、個に応じた課題を設定したり多様な学習課題を提示したりすることが大切です。

学習状況は、授業中の様子やテスト、質問紙調査などを通して把握します。学習意欲も学力を支える重要な要素であることから、学ぶ意欲を測る質問紙（学習に関するアンケート）（p 68 参照）も、学習状況を把握する方法の一つと言えます。

➡ 「一人一人の実態に配慮した授業」と学ぶ意欲の状況の把握には強い関係がある。

ア、イ、ウから、「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」と「学ぶ意欲をはぐくむ授業づくり」の関係は、次に示す図のようにまとめられます。両者の考え方には共通する部分が多いと考えられます。



以上のことから、「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」を知見の蓄積のある「学ぶ意欲をはぐくむ授業づくり」とほぼ同義と捉えて調査研究を行うこととし、次のように【研究の内容】を設定しました。

(3) 研究の内容

【研究の内容】

ア 教科指導における「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」の提案

「第2章 子どもが意欲的に取り組む授業づくり例」(p16～)

イ 調査協力校の実践（子どもが意欲的に取り組む授業づくり、校内研修、児童生徒の実態の把握等）の紹介

「第3章 調査協力校の実践」(p34～)

ウ 子どもが意欲的に取り組む授業づくりに資する校内研修プログラムの提示

「第4章 校内研修例」(p56～)

※ ア、イにおいては、授業の中で行う「学びに向かう集団づくり」の具体例についても紹介します。

※ イにおいては、学ぶ意欲と自己有用感の調査結果を基に、「協同学習」と自己有用感の関係等について解説します。



ここに注目！①

授業の中で行う「学びに向かう集団づくり」(1)

集団づくりは、主に、学級（ホームルーム）経営、学級（ホームルーム）活動、学校行事を通して行われます。しかし、授業における学習活動の場も学びに向かう集団づくりの場になります。

ここでは、授業中の工夫を凝らした取組が「学びに向かう集団づくり」に役立つことについて確認します。

○授業の中での、「帰属意識の高い学級」、「互いに高め合える学級」づくり

子どもたちは、協同学習を通して、互いに学び合ったり教え合ったりすることで、自分が「役に立っている」という意識や自信をもつようになります。また、授業中に子どもが間違った発言をした際に、教師がその発言を尊重し授業展開の中でうまく生かすことで、自信を失うことなく再び発言しようと思うでしょう。授業中の配慮により、学級全体において、他者の意見を尊重する雰囲気や醸成することができます。

こうしたことを地道に積み重ねていくことにより、一人一人が所属感や連帯感を感じる学級、互いに高め合える学級がつくられていきます。

○授業の中での「規範意識の高い学級」づくり

話し方・聞き方、ノートを取り方、話合いの仕方等の決まりにしたがって授業に臨ませることが、子どもたちが円滑に学習できることを実感することや授業以外の部分でも進んでルールやマナーを守ることにつながります。

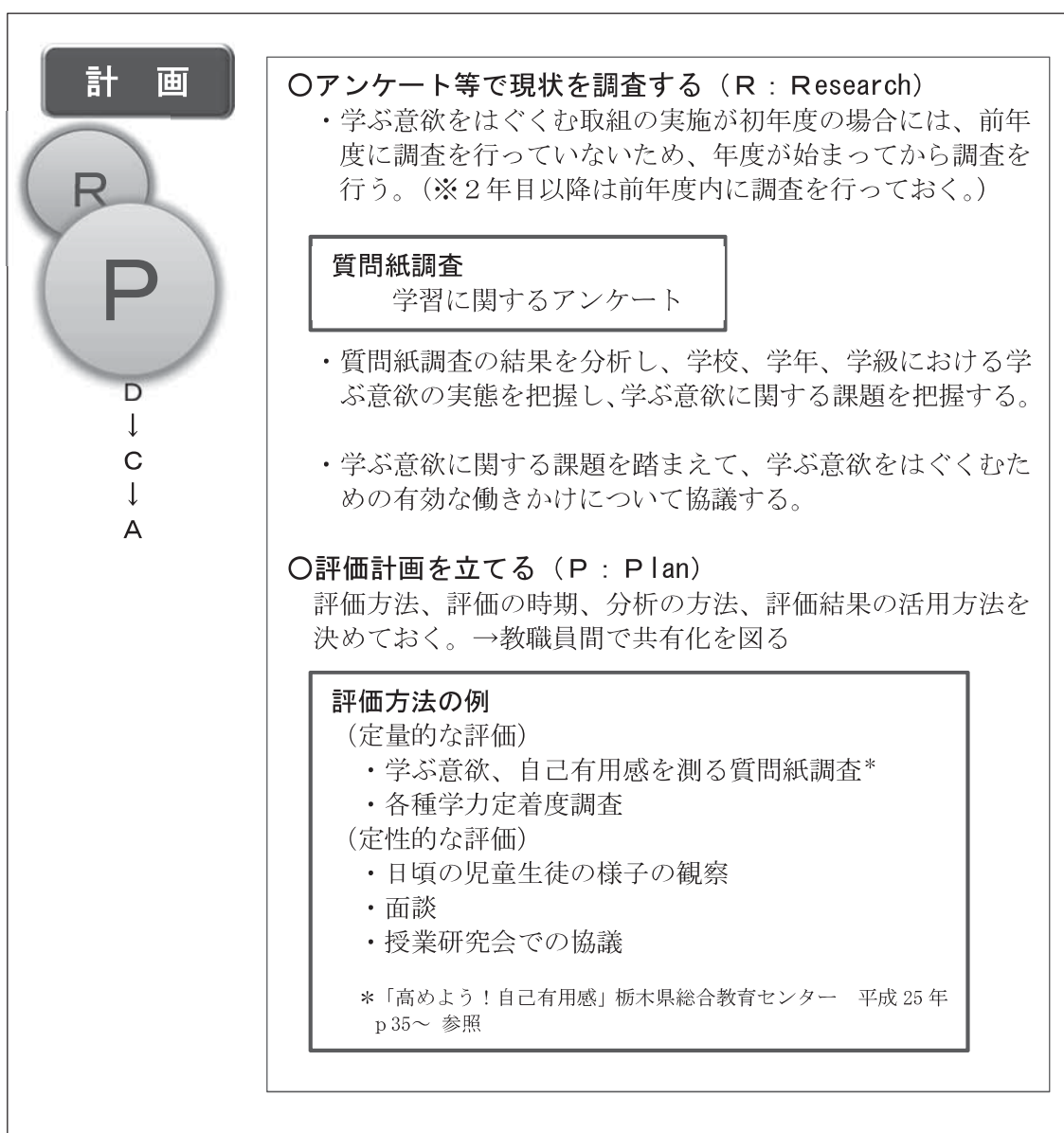


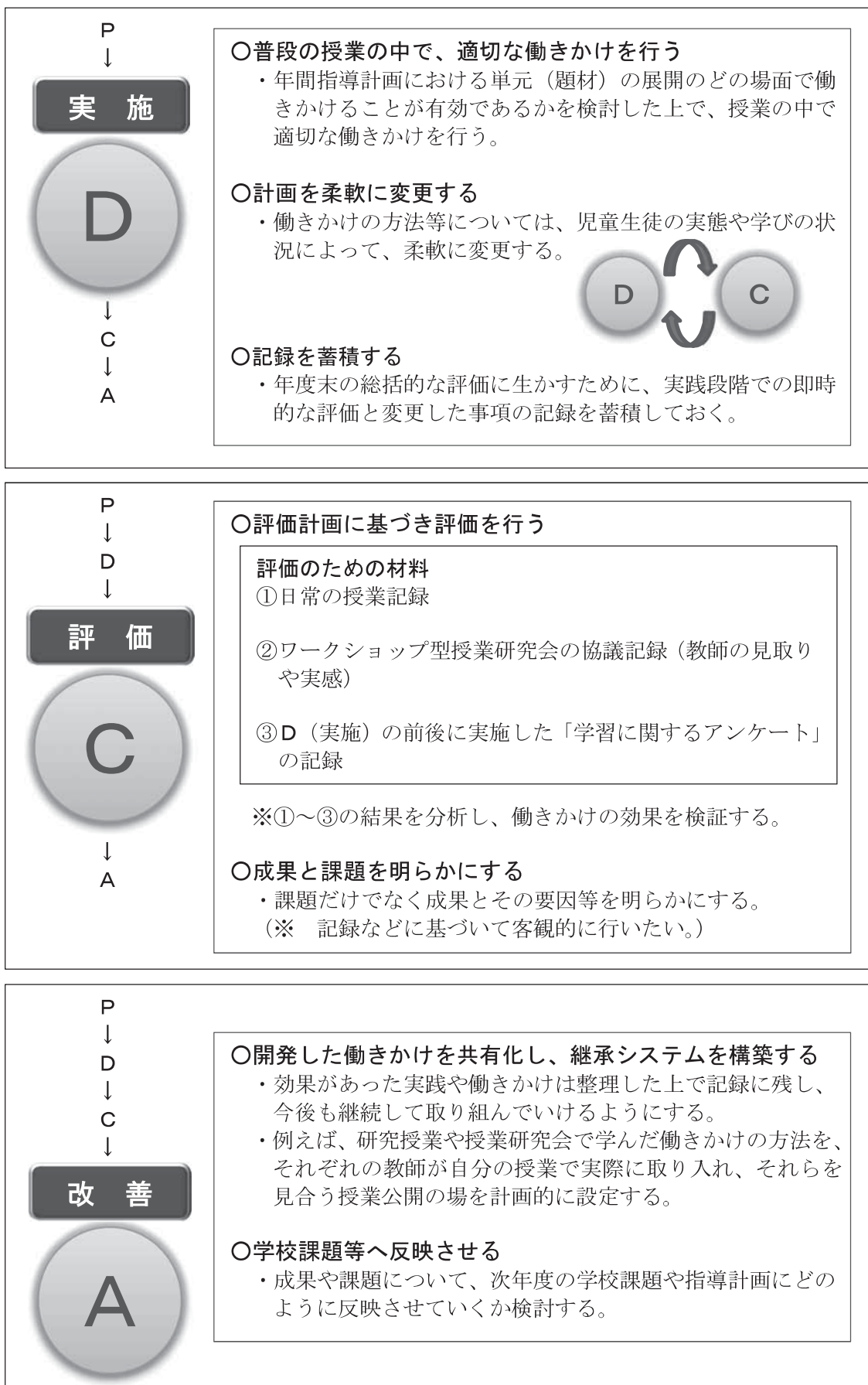
PDCAサイクルを生かし、子どもが意欲的に取り組む授業をつくる

学ぶ意欲をはぐくむ場の中心が授業であることは言うまでもありません。しかし、学ぶ意欲をはぐくむ営み、そして児童生徒への具体的な働きかけを、教師が個人で考えて実践するだけで高い教育効果を得られるでしょうか。その実践が個人の中で閉じてしまうことになり、教職員間での取組の共有化やその効果の検証をすることは難しいでしょう。

そこで必要になってくるのが、PDCAサイクルの確立です。まず、児童生徒の状況を把握した上で計画を立てます。そして、全教職員で手立てを共有し、教育活動（授業）の中で実践を進めます。一定の期間を経て、児童生徒の学習状況（ここでは学ぶ意欲の状況）を把握した上で成果と課題を明確にし、次年度の学校課題や指導計画に反映させます。こうしたPDCAサイクルの各段階における有効な手法が校内研修と言えます。

PDCAサイクル各段階の考え方の例について、次の図に示します。







ここに注目！②

有能感と称賛

当センターが平成 22 年度に行った「学習に関するアンケート」（小 3～中 3）の結果から、次のような特徴が分かりました。

- ・「有能感」はどの学年も、平均値が最も低い。
- ・発達にしたがって、平均値が低下している。

学年段階が上がれば学習内容が難しくなるため、「自分は勉強ができるほうだと思う。」といった「有能感」が低くなることは、ある程度やむを得ません。こうした発達の段階にある子どもたちの「有能感」を高めるのは容易ではないでしょう。

とは言え、新たな学ぶ意欲を喚起するためにも、「有能感」を少しでも高めていきたいものです。「有能感」を高めるには、「できた」「分かった」という喜びや達成感を味わわせるために、授業の展開を工夫したり、努力を要する子どもへの適切な支援をしたりすることが大切です。加えて、教師による称賛も欠かせません。

「学ぶ意欲をはぐくむ」リーフレット（栃木県総合教育センター 平成 25 年）では、有能感を感じられるように、教師による言葉かけの大切さを次のように示しています。

- タイミングよく具体的な言葉かけをする。
- 子どもなりの発想を認め知的好奇心をもたせる。

また、指導資料「学業指導の充実に向けて」では、満足感・達成感を味わわせるために教師からの称賛について次のように示しています。

- 「小さいことから」「具体的に」「多様な方法で」の 3 点を心がけて、児童生徒をほめる。
- 一人一人の児童生徒に応じた声かけをする。
- 学習結果ばかりでなく、その答えに至るまでの考え方や過程、努力にも視点を当てる。
- 活動中にも賞賛を行い、学習意欲の持続につなげている。
- ほめるタイミングやほめ方を工夫している。

特に重要なのは、「**学習結果ばかりでなく、その答えに至るまでの考え方や過程、努力にも視点を当てる**」ことです。どの教師も、できたことをほめることは行っていることと思います。しかし、できたことだけをほめる意識でいると、学力が定着していない子どもをほめにくくなってしまいます。特に学校段階が進むと学習内容が難しくなるので、その傾向が顕著となります。

そこで、結果だけを見ることなく、学習過程の中で、些細なことであってもその子どもができたことや、教師が「いいな」と思ったことをほめることが大切です。併せて、例えば、自分の考えを根拠とともに説明することによって思考力を働かせることの大切さについて、普段から子どもたちに説明することが必要です。学習過程の大切さを理解させないと、いくら過程でほめても、結果に目が向いてしまい有能感が高まりません。

学習過程でのちょっとした達成感を感じさせるための教師による称賛の積み重ねが、勉強が苦手な子どもの有能感を少しでも高める手立てとなるのではないのでしょうか。

発達の段階によって、称賛の受け止め方や意欲への結びつき方が変わってきます。次のような点に注意しましょう。

○小学校

- ・教師の称賛が中心。（授業の中でよさをほめ、間違いも大切にする教師の姿勢が、児童の姿勢にも影響する。）

○中学校・高等学校

- ・教師は全体の前ではなく個別に称賛する。（周囲からの目が気になる場合）
- ・教職員間でよさを共有する。（他の先生からほめられることで、自分は多くの人に認められているという気持ちになる。）そのよさを家庭にも伝えていく。
- ・学び合いの中で、子どもが互いに相手のよさに気づき、振り返りの相互評価で称賛し合う。